

俳人の“終焉記”

藤田真一

のつけからこんなことを話題にするのは、正直はばかられるのだが、あえて「生まれる」と「死ぬ」という対照的な二語について一考してみる。生と死、人間にとってのがれがたい、この二事の間には、おどろくほどの相異、ないし落差が存在するではないか。中身ではない、ことばの問題である。それぞれをあらわす語彙の多様性、同義語や類語の種類と数である。

「生まれる」を言い換えようとすると、どれだけの語が出てくるか。純粹の和語にかぎってみると、「生まれる」以外には思いつかないではないか（敬語・派生語・複合語などはのぞく）。「生をうける」「生じる」の語は、すでに漢字音の助けを借りている。「誕生」「生誕」「出生」「新生」となると、もう漢語そのものである。問題はその先にある。漢語系の語彙を加えたところで、そのバラエティはわずかなものでしかないのだ。手もとに

ある類義語辞典をひもとくと、「産湯を使う」とか「呱呱の声をあげる」などの成語がみられる。ただそれらを含めても、「誕生」を意味する語例は十にも満たない。理由はともかく、この世に出現するめでたいはずの出来事なのに、これを表現する手立ては意外なほどに乏しい。

引きかえて、「死ぬ」のほうはどうか。辞典をひくまでもなく、言い換えられる語彙は次つぎと思ひ浮かぶだろう。和語だと、「果てる」「亡くなる」「事切れる」「逝く」「眠る」「息が絶える」「冷たくなる」などと、いくらでも出てくる。漢語系ならば、「死する」「没する」「滅する」「卒する」「薨する」にはじまり、「死亡」「死去」「長逝」「他界」「落命」「臨終」「永眠」「畢命」「往生」「成仏」「昇天」等々、二字熟語になるときりがない。その他、「世を去る」「命が絶える」「はかなくなる」「土に

帰る」「天寿を全うする」「不帰の客となる」「鬼籍に入る」「泉下の客となる」「お迎えが来る」などといった成句、あるいは比喻のような語句にまで広げると、たちまち他人の手を借りても数えきれなくなる。

おなじ人間なのに、その始まりと終わりとで、どうしてこれほどの差が生じるのか。とりわけ気がかりなのは、後者について、単刀直入の表現だけでなく、婉曲的な言い回しが目立つことである。ことの性質上、そうならざるをえないということか。

さて、「死」をあらわす用語で、意図的に右にあげなかった語がある。「終焉」である。歴とした漢字熟語でありながら、漢日の彼我において、字義・用法ともいささかのずれがあるかのようにみえる。本論のなかで再説することになるが、とりあえずここで特記しておくべきは、この語が連歌師や俳人の臨終のさまを記述するさいの表題として、目立って使用されていることである。まっさきに思いあたるのは「芭蕉翁終焉記」、つづけて「夜半翁終焉記」ということになろう。「終焉記」の命名法になんの疑問を抱くこともなく、われわれは接してきた。しかし、同種の文辞をみるにつけ、いちど原点に立ち戻って考える必要がありそうである。そこでまず、其角や几董の追悼文のあり方や命名法から議論をはじめようとおもう。以上、本論にはいる

にあたっての端緒とする。

一 蕪村追悼集「から檜葉」

天明三年（一七八三）十二月二十五日未明、夜半亭蕪村は六十八年の生涯を閉じた。年末という時節を慮って、本葬は翌年一月二十五日と、ちょうどひと月後に営まれた。

平生からもっとも身近にあつて、蕪村の画・俳にわたる活動をささえた門弟几董は、さっそく追悼集の編集にとりかかった。そして葬儀のあと、時日をあまりおかず上梓を実現した。百池筆の「天明四年甲辰孟春（一月）」の跋文があり、また「五七日（三十五日）」に催された法要の記事が見られることを考慮すると、二月ないし三月ころには刊行をみたと推測される。

書名を「から檜葉」という。命名は、編者几董のこの句によっている。

から檜葉の西に折る、や霜の声

逝去翌日の十二月二十六日に夜半亭でおこなわれた、一門の「追善之俳諧」（一順歌仙）の立句である。こうした事情は判然としているのだが、肝心の表題「から檜葉」の意味となるとやや不明なところがある。「から檜葉」とはなにか。一語なのか、

それとも複合語なのか。たとえば、「から」と「檜葉」を分けてみると、「檜葉」は檜の葉っぱをいうのだろうか。でも、そもそもなぜこの木を持ち出したのかも不審、さらにその葉をうたい、そこへ「から」という接頭辞をつけた語義も不明瞭。この造語意識をどうみればよいのか、ことは単純にはいかない。ひとつずつおさえながら考察を進めてみる。

まず、「檜」である。小学館の『日本国語大辞典』（第二版）には、「ヒノキ科の常緑高木。日本特産で、本州の福島県以南、四国、九州の屋久島までの山地に生え、広く植林されている」と説明される。高さは三十〜四十メートルにもなり、直径も一〜二メートルに成長するという。また耐久性にすぐれていて、建築材として重用されるとも書かれる。この記載は、『大和本草』の「凡檜ハサシテ能生ズ。二十年ヲヘテ大木トナル。柱トシ、器トス。良材ナリ」という記述と共通性が認められる。短文ながら要点はみつ、①挿し木でたやすく根付く（植林に適している）、②二十年で大木となる（成長がはやい）、③有用な良材である（人間の暮らしに役だつ）、ということになる。

葉についての記述は、『角川古語大辞典』に、「小枝は三、四回交互に分れて羽状をなし、緑色鱗片状の葉が密着する」とあって、饅頭や料理の下に敷くものとして用いられたという。と

なると、葉もまた有用かつ身近な素材ということになる。そのうえで、「から」の接頭辞を加えてみると、「枯山」「枯野」「枯物」などというように、下に他の語をともらったとき、「枯」が「から」と語頭変化した言い方であるという説明が該当する。

かりにかく了解できたとして、「から檜葉」の語が三要素から成り立っていて、ここまでして考えないといけないとなると、だれでもたやすく理解の届く語彙とは申しがたいではないか。まず「檜」があつて、つぎに「檜の葉」となり、それに枯れるをあらわす「から」の接頭辞がかざる、そこでようやく、〈枯れた檜の葉っぱ〉という複合語ができあがる。一語としてのまともまり感に欠ける気味もさることながら、それ以上に、季語を思わせる機能性についても疑念が生じるではないか。本句のばあいは、下五の「霜」が冬季をしめしており、「から檜葉」の語に季をもたせなくともよいのだが、「から（枯）」の語を見ると、冬の気分の重複を否定したいともいえる。

さらなる問題は凡菫の句意である。「から檜葉」を右にみたような意に解したとすると、枯れた檜の葉が西のほうへ折れてしまいました、そのあと折れたときの音が、冬の霜の上を遠ざかつて行くように聞こえました、というような解釈になるだろうか。西は西方浄土を暗示し、霜の声は亡き師の足音であり、気

配であり、さらには在りし日の存在感ともなるだろう。

中七・下五がいちおう了解されたとして、あらためて疑念がもたげるのは、上五である。どうして枯れた葉が、西へ折れねばならぬのか。そもそも「葉が折れる」などというか。折れるというのは、木であり、幹であり、枝であらう。葉は色づく、枯れる、落ちるなどというが、折れるとはいわない。となると、枯れて折れた檜の葉というとなえ方自体が問題ということになる。「から檜葉」の語義を再考する余地がありそうである。

『日本国語大辞典』をのぞくと、「唐檜葉」の項目があつて、植物の「びやくしん」の異名であるとのみ書かれている。そこで「びやくしん」をみると、「柏檜」という表記のもと、ひのき科の常緑樹で、伊吹柏檜、略して伊吹のこととある。ただし異名が数多くあつて、特定は容易でなさそうである。また『本草綱目啓蒙』では「柏」の項目のもと、さまざまに列挙される同類名のなかに、「柏檜」もあがつている。『角川古語大辞典』によると、「おもに幹の高低や葉の鱗片状か針状かによる分類」がなされていて、それだけの異名が称せられるということらしい。こうなると、木の種類はひとつに決しがたい。

樹木の実態の詮索をひとまず脇において、かりに几董が「唐檜葉」ないし「柏檜」を念頭にしつつ、この木が折れて霜の上

に倒れこんだ瞬間をよみこんだのだとすると、なんとか辻褄は合いそうである。「唐檜葉」、すなわち蕪村が、西方浄土のある方向へと倒れこむ音がした、というようなことになるだろうか。蕪村逝去の意味は、なんとか通じるだろう。

句意の理解にこれだけ手間取った最大の要因は、やはり「から檜葉」の語にある。複合語として受け取るべきか、一語として解すべきか、端から戸惑いがつきまとう。『近世俳句大索引』（明治書院）や『古典俳文学大系』の索引をひいても、「からひば」を用いた句例を他に見出すことができない。さらに理解を遠ざけているのは、「から」と平仮名で書かれている点にもある。本句、じつは几董句集『井華集』にも入集するものの、表記はまったく同一で、理解のみちは開けない。「枯」なのか、「唐」なのか、あるいは両様をねらつての書き方なのか。解釈にユレを生じさせる原因となっている。

表題に不確定さをもたらしているのは、本書の成立にかかわる外的条件にも遠因がある。それは、其角編の芭蕉追悼集「枯尾華」（元禄七年冬刊）にはかならない。本書の命名は、芭蕉初七日の十月十八日に追善百韻を詠じるさい、其角がよんだこの発句によっている。

なきがらを笠に隠すや枯尾花

几董がこの方式に学んだのはまちがいない。其角の「かれおばな」を意識しつつ、書名を「からひば」に置き換えたということになる。由縁ある命名法といつてよい。先述のように「から」が「枯」の意をもった接頭辞とするなら、枯れた尾花（薄）から枯れた檜葉へといたる距離はみじかい。この流れにのると、「から檜葉」は「枯檜葉」ととのがしぜんにみえる。しかし右にみたように、敬愛する師蕪村の永眠という事態をよみこんだものとして、「枯尾花」の音声の類縁性を匂わせつつ、「唐檜葉」という目なれない語句を盛り込んだのだとひとまず理解しておく。ただし、樹木としての実態の特定は、しばらく不問に付すこととする。

二 ふたつの終焉記

ここで改めて、芭蕉と蕪村それぞれの追悼集、「枯尾華」と「から檜葉」についてやや詳しくみることにする。まず外形的に把握すること、今後の議論の必要に応じて、書誌事項の概要をしめしておく（ただし個別の本ではなく、一般的にみられる書誌の概要にとどめる）。

枯尾華

編者 其角。

書型 半紙本、二巻二冊。袋綴じ。なお柿衛本は特装大本。

題簽 「枯尾華 上（下）」（中央）。

内題 なし。ただし巻頭に「芭蕉翁終焉記」。

丁数 上巻＝二十七丁、下巻＝二十六丁。

刊記 「寺町二条上ル丁 井筒屋庄兵衛板」。刊行時期の記載

はなし。

版下 其角筆。

から檜葉

編者 几董。

書型 半紙本、二巻二冊。袋綴じ。

題簽 「から檜葉 上」、「可羅比波 下」（ともに中央）。

内題 なし。ただし巻頭に「夜半翁終焉記」。

丁数 上巻＝二十三丁、下巻＝十八・五丁。

刊記 なし。ただし橘仙堂刊か。刊行時期の記載もなし。

版下 几董筆。

併置してみると、書形の見目からして、かなりの類似性を

有していることが見てとれる。なによりも、追悼集に上下二巻

を充てるといふ画期的な企画そのものが、一世紀ちかくの時を隔てて継承されているのが注目される。表題の類似性もさることながら、二巻仕立てを目にしただけで、元禄の追悼集を襲おうとした天明のもくろみが透けて見えるといつてよい。そこでつぎに、巻頭に配された追悼文のありようを比べてみよう。まず、全体の内容と構成を概括的にながめてみる。

枯尾華

【上巻】

1、「芭蕉翁終焉記」（其角作）。

2、「元禄七年十月十八日 於義仲寺／追善之俳諧」百韻（其角立句）。

3、「初七日迄」に届いた追悼発句百十六句。

【下巻】

4、嵐雪追悼句文（芭蕉墓前）。

5、江戸蕉門追悼の歌仙四巻および発句四十九句。

6、「十一月十二月初月忌／丸山量阿弥亭 興行」百韻（嵐雪立句）。

7、「追加」歌仙一卷と発句十九句他。

から檜葉

【上巻】

1、「夜半翁終焉記」（几董作）。

2、「天明三年癸卯十二月廿六日 於夜半亭／追善之俳諧」一韻五十八句（几董立句）。

3、「初月忌」までに届いた追悼発句四十四句。

4、「正月廿五日葬送」春夜楼追悼発句二十六句。

5、その他の追悼発句。

6、道立の追悼句文。

【下巻】

7、暁台の追悼句文と一順歌仙。

8、月居の追悼句文。

9、他門追悼発句十一句。

10、無腸（上田秋成）の追悼句文。

11、各地からの追悼発句百二句。

12、「天明四年甲辰孟春」百池追悼文。

13、「盟弟 雨森章迪」追悼文。

細目において、内容・構成面では全体的にみて、かなりの共通性を認めることは容易であろう。巻頭の「終焉記」、直後にく

る追悼連句、それにつづくさまざまな追悼のための連句に発句、さらには折おり挿入される追悼句文、といった形態において、きわめて近い相似性をみせている。個別の作品の意図や作風、あるいは入集する顔ぶれのようななどはともかくとして、奉じられた句々や文章を上下二冊に配するという基本姿勢において、几董が「枯尾華」を範としたのはまちがいない。つね日ごろから、筆跡をひたすら其角流儀になぞらえるほどの私淑ぶりをみせる几董として、敬愛する師を追慕するのに最高の手本だったにちがいない。

師匠を追悼するにつけて、「夜半翁終焉記」と題して巻頭にすえるのは、芭蕉追悼の精神にならうにうつてつけの形態だったのだろう。読者にとつても、まっさきに飛び込んでくるこの表題を目にすると、ただちに芭蕉の追悼文を想起できる仕掛けになっている。几董は、蕪村の生涯や俳業、さらには末期のさまざま、芭蕉のそれと重ねて味わえるようにといざなうねらいを隠そうとはしない。其角の筆跡を髣髴とさせる本文の見映えは、その心象を分厚くするに効果観面（てうくあへん）というべきだろう。

「終焉記」という表題に導かれて読みだすと、文章の運びのうえでも類似性を感じることになる。もちろん語句や句の踏襲・準拠といったぐいの類似性ではない。だから、両者を左右に

おいて比べるといった単純な比較は、徒勞に終わる。そこで試みに双方の終焉記を段落に分けて、それぞれの流れを順に列挙してみると、およそ以下のようになる。

「芭蕉翁終焉記」計十四丁

① 老化、② 芭蕉庵移住後の経緯、③ 各地への旅のさま、④ 浪花病臥の吟、⑤ 本復を願う門人の発句、⑥ 其角の来坂と門人の発句、⑦ 逝去と遺骸の近江への搬送、⑧ 義仲寺葬儀。

「夜半翁終焉記」計十丁

① 生地にはじまる略歴、② 画家・俳人としての蕪村のあり方、③ 秋九月の宇治田原遊楽、④ 病臥中の文事、⑤ 去来する思い、⑥ 末期の三句、⑦ 逝去から荼毘、⑧ 金福寺埋葬。

人となりの紹介にはじまり、経歴や生きかたを略記し、そして病臥に及んで、ついには逝去のときを迎えるという文章の流れ、ないし組み立ては酷似している。其角の構文を、几董が文章作りの指標としたのは疑う余地はない。

さらに案文の技法においても、見習おうとしたふしがある。先蹤たる其角の文章を二例ばかりあげてみる。「橋あり、舟有、林あり、塔あり、花の雲鐘は上野か浅草かと、眼前の奇景も捨がたくをの／＼がせておもふもむつまじく侍れど……」と、芭蕉の発句をまるごととはさみつつ、芭蕉庵からの風景を叙述す

る個所である。その一方で、「心をのどめてと思ふ一日もなかりければ、心気いつしかに衰減して、病^ふ雁のかた田におりて旅ね哉と、くるしみけん」などと、名唱を引きつつ、芭蕉の身心の衰微を描くこともある。

かたや几董の書いた文章では、「宇治のおく田原といふ所に杖を引、絶壁懸河奇石怪岩に眼をよろこばしめて、帛^ふを裂^さ琵琶の流や秋の聲、是は白氏が四弦一声如裂帛といへるにおもひよせしとぞ」と、宇治川探勝の喜びを記述する。かとおもえば、「遺骨は金福寺なる芭蕉庵の牆外にとりおさめ、かたの如き卵塔をたて、永く蕉翁の遺魂に仕へ奉らしむ。我も死して碑にほとりせん枯尾花、とかねて此山の清閑幽景をうらやまれしかば……」などと埋葬のいわれを説いてみせる。いずれも蕪村の発句を文中に織り込みつつ、文章をこしらえている。この几董の文章作法が、元禄の其角にまなんだものであることは明白だろう。

双方の類似性という点については、終焉記の文章を終えてしるされる、それぞれの署名の様式にもみられる。

於粟津義仲寺牌位下 晋子書 (芭蕉翁終焉記)

於洛東金福寺牌下 几董謹書 (夜半翁終焉記)

几董が恩師蕪村の追悼書を編むにあたって、私淑する其角の聲^{ひそみ}に習って本づくりをした。一書全体のつくりを踏襲するのと

もに、巻頭においた追悼の「終焉記」を誠実に学^{まな}ぶ姿勢をしめしている。両者のつよい紐帯を否定することはできない。

三 「終焉記」の濫觴

芭蕉にしても、蕪村にしても、その逝去をうけて、「終焉記」という題のもとに堂々たる文章がつづられた。さらにより画期的な事態は、単独で追悼集の出版まで実現してみせたことである。この問題に関しては、塩崎俊彦氏の論考「貞室自筆「貞徳終焉記」について」(『連歌俳諧研究』九十八号)のなかで、いわば逆の方向からの考察がなされている。これを要約すると、元禄三年刊の『詞林意行集』のなかに「宗祇終焉記」が収められており、それが「芭蕉終焉記」を生む誘因となつて、「貞徳終焉記」の命名につながつたというのだ(詳細については第四章でふれる)。

たしかに、其角が芭蕉末期のようすを伝える文章をつづり、追悼の一集を編み、表題を案ずるにあたって、数年前に刊行された文集のなかからヒントを得たということはありうる。その蓋然性の高さは、つぎのよく知られた一節からも推し測ることができる。

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり。

これは、芭蕉「笈の小文」冒頭の周知の文章である。かたや『詞林意行集』の序文には、このようなくだりがある。

西^一行^ガ之^ニ於^ル和^ニ歌^ニ、宗^一祇^ガ於^ニ連^ニ歌^ニ、各^一得^ル其^妙者、与^ト司馬子長^一殊^ニ域^ニ同^ニ日^ノ之^談ナリ也。

これだけの相似性を目にして、芭蕉の文章にとつて無縁とはいいたいだらう。「笈の小文の旅」そのものは、貞享四年から翌年にかけてなされたものだが、それを文章化しようとしたのは、元禄二年の奥州旅行以後、かつ上方滞在中だろうと考えられているが、そのことと矛盾は生じない。旅行と執筆の合間に、京都で『詞林意行集』が出版されたことになる（関大本は銭屋七郎兵衛・山形三郎右衛門の相版）。在洛の芭蕉がいちはやく目にとめた可能性もあるだろう。となると、其角もなんらかのツテで同書を読み、集中の「宗祇終焉記」を参考にしたことを想定するのもたやすい。

ただし、不用意に断定するにはいささかためらわれる。塩崎氏も指摘するように、『詞林意行集』は紀行文集である。『日本古典文学大辞典』（岩波書店刊）の解説（上野洋三）を借りると、まず「中世・近世の紀行文集」と規定して、さらにつぎの

ように詳述される。

宗久の「都のつと」、二条良基の「をじまのすさみ」、宗長の「宗祇終焉記」など中世の紀行文と、細川幽斎の「東国陣道記」以下の近世人の紀行文、すべて三十三編を集めて、京都を中心に東西南北の方角別に配列したもの。

そして、「紀行文を集成刊行した最初のものとして貴重である」という評価がなされている。このような性格をもつ集成であるなら、芭蕉が紀行文の執筆にかかるとき、参照もしくは参考を考えたとしてもふしぎではない。

とはいえ、こうした紀行文を集めた書物のなかに、「終焉記」と題する文章があるのは、紀行文集としての違和感は否めない。塩崎氏はこれについても、「この作品を『道の記』の一体、すなわち「宗祇の最後の旅の記」と見る意識があつたと考えるべきだろう」と論じている。たしかに記述は、文龟元年（二五〇一）九月の越後にはじまり、翌年関東に出て、さらに東海道を東上する途上、七月末に箱根で息を引き取るまでを描いている。費やされる筆の大半は旅のようすであり、死亡記事は旅先の一事にすぎないような描きぶりである。

臨終の場面は、少々錯乱の気配があつたのち、「灯火の消ゆるやうにして息も絶えぬ」と書かれるのみである。意外なほど淡

白な叙述であるとともに、末期の一句や辞世の作すら記録されていない。このあとは宗祇埋葬から、宗長らが駿府の庵で月命日をいとなむようすがつづられる。そうすると、宗祇永眠を伝えるのが本作の本旨ではなくて、むしろ宗長の旅行のなかに、宗祇の死亡記事が織り込まれているとさえいえる書きぶりである。見方を変えれば、作品そのものは宗長の旅の記ということもでき、『詞林意行集』に収められていて違和感がないことになる。もちろんあくまでも宗祇とともにある旅であり、宗祇逝去という大事件が生じた紀行である。

それではどうして、紀行文集成である企画のうちに、『終焉記』などという表題をつけたのか。本作の末尾近くに、猪苗代兼載が「せめて終焉の地をだに尋ね見侍らんとや」として、箱根の湯本までやってきたという文章がかるうじてあるものの、これをもって命名の所以とするには、いかにも小事・些事にすぎるといえる。

考慮すべきは、成立以来ずっと写本として伝えられており、諸本においてさまざまな表題が付されていることである。たとえば、新日本古典文学大系が底本とした内閣文庫本には、「宗祇臨終記」の表題が与えられているという。となれば、紀行文と見立てた『詞林意行集』とは一定の懸隔があるということにな

る。ちなみに、この内閣文庫本の影印を収めている「駿河古文書会原典シリーズ」4の解説では、本作には「宗祇臨終記、宗祇老人終焉記、宗祇道記、宗祇族伝終焉記、宗長道記等」の表題が見受けられるとする。この多様性は諸本の多さだけに起因するのではなく、内容のとらえ方による面も無視できない。

こうしたブレに決着をつけたのが、元禄三年刊の『詞林意行集』であつたと想定することは困難ではない。長いスパンでその後のなりゆきをみると、死者を悼むについて、この表題へと収斂してゆくことになるようだ。とはいえ、その流れはゆっくりしたものだったようである。たとえば、元禄六年刊行の『扶桑拾葉集』においては、死者を悼む文章がじつに多数おさめられているものの、その大多数には誰それを「いためる辞」という題が付されるばかりで、『終焉記』の影響は認められない。ほぼ同時期ながら、大きな隔たりをみないわけにはいかない。

この経緯のなかで、改めて問題になるのは、『終焉』という語のあり方である。これについても、塩崎氏がすでに考察しているのを再度なぞることにする。『大漢和辞典』では、①「身が落ちつき安んずること。又、身の落ちつき処とすること」、②「きはまること。窮まつて通じないこと」、③「命のをはり。いまは。最期。臨終。死」の語義があるが、①②には中国の用例をあ

げているものの、③については用例がいつさいない。

これにたいして、小学館の『日本国語大辞典』（第二版）では、「晩年を送ること」が第一義として掲げられ、第二義として「死に臨むこと。死のうとすること。また、その時」と、「臨終」に等しい意味がしるされる。それぞれにしかるべき用例も与えられている（第三義は比喩的用法で、近代の用例のみゆえ略す）。ところが意外なことに、ここには「大漢和」の①②の語義が盛り込まれていない。さらに『角川古語大辞典』の「終焉」の項には、「日本での用法としては、一生の終り、命を終えること」という注目すべき説明が備わっている。死ぬという意味は日本での使い方だと解説されるのだ。ということは、中国で使われてきた本義とは異なる語法だったことになる。

日本では平安期以降の文献において、臨終の意味で「終焉」の語をみることは珍しいことではない。そのうち二例のみをここに書き出してみる。まず『平家物語』巻十「敦盛入水」のなかに、「源氏の先祖伊予入道頼義」が、「終焉の時、一念の菩提心ををこししによつて、往生の素懷をとげたりとこそうけ給はれ」という一節が見られる。一読して、かの国で用いられてきた語義ではなく、まさに本邦で独自に広まった用法をそっくり生かしていることが明白である。

もう一例は、『徒然草』一四三段である。その前半を掲げてみる。

人の終焉の有様のいみじかりし事など、人の語を聞くに、ただ「静かにして、乱れず」と言はば、心憎かるべきを、愚かなる人は、あやしく異なる相を語り付け、言ひし言葉も振る舞ひも、己れが好む方に替め成すこそ、その人の日頃の本意にも有らずやと覺ゆれ。

これもまぎれもなく、臨終場面をとりあげた一節にほかならない。『徒然草』は鎌倉末期の成立ながら、江戸時代になつて、あふれんばかりの版本によつて一気に普及し、読者層を急速に拡大した作品である。その書物に「終焉」の語が、なんのためらいも断りもなく、日本的用法そのものでおさまっているのだ。そうなると他の古典を持ち出さずとも、『徒然草』の用法ひとつで、この語義の普遍性が保証されるとしてもよい。

こうしてみると、日本ではかなり古くから、「終焉」を「死ぬ」の意に直結して用いていたことがうかがえる。師の亡くなるようすをつづるものとして、其角が「終焉」の語を充てたのも、おそらくごくしぜんな思ひつきによる命名だったのだらう。かりに『詞林意行集』には、「宗祇終焉記」が紀行文として収録されていたのだとしても、臨終記の意味で「終焉記」の語を解

したところで、疑問の生じる懸念はなかっただろう。芭蕉の追悼文が「宗祇終焉記」を引き金として、蕉門随一の才子其角の手で生み出され、以後の「終焉記」の濫觴となったとしたら、その意義はけつして小さくはない。

四 終焉記の諸相

其角作「芭蕉翁終焉記」が、公刊された追悼集「枯尾華」の巻頭をかざったとあれば、その影響力はどれほどのものだったか。今からみると、師にかぎらず、逝去した敬愛すべき俳人へのオマージュとして、「終焉記」が続出することが予想されるのではないだろうか。

ところが案に相違して、その傾向は必ずしも顕著とはならなかった。蕉門の代表的文集である「本朝文選」（宝永三年刊）をひもといても、「終焉記」は見られない。同種の文章として確認できるのは、巻之六所収の「誄^{うしな}類」にみえる三篇の作品である。それらには、芭蕉作「嵐^あ蘭^{らん}誄」、去来作「丈艸^{さく}誄」、許六作「去来^か誄」と題されている。編者許六は、三百石取りの藩士であり、六芸に通じたとされる人士だった。あるいは和製用語にもみえる「終焉記」の語は、あえて避けたのかもしれない。も

っとも、本書が範をとったとされる「文選」にも、弔文類に「弔屈原文」と題する文章があるものの、「誄」でも「終焉記」でもない。日本でも流行した「古文真宝」には、「賦^ふ類」に「弔屈原賦」と題して、右「文選」と同作がみえるのみである。

あるいは、支考の「笈日記」（元禄八年刊）をうかがってみると、同種の文章として、「悼芭蕉翁」「悼松倉嵐蘭」「祭図司」の三篇が掲載されている。一点目は、尾張熟田の「連中」が芭蕉追悼発句を寄せるにあたって付された文章で、比較的短文である。二点目の「悼松倉嵐蘭」は、「本朝文選」の芭蕉作「嵐蘭^{らん}誄」と同一作で、小異はあるものの、其角編「末若葉」（元禄十年刊）にも「悼嵐蘭詞」としてみられる文章である。三点目は、羽黒山の呂丸（図司左吉）が京都で客死したことをうけて、支考が「手向」けた文章であり、これに芭蕉らの追悼句が添えられている。支考は「笈日記」（難波部）のなかで、其角の「終焉記」に言及があり、この語への認識がなかったわけではない。にもかかわらず、これだけの多彩ぶりをみせているのだ。

内容の相異や細かい吟味はさておき、亡き人を追悼する句文について、「悼・誄・祭」など種々の語が充てられている。そのあいだに区分意識があるのかどうか、かならずしも明確とはいえない。とりわけ嵐蘭追悼の作など、同一内容でありながら、

「悼」であったり、「誄」であったりと両様の命名があつて、固定的ではない。「本朝文選」の取材先が『笈日記』だったとすると（『新編日本古典文学全集』「松尾芭蕉集2」解題）、「誄」の文字を冠したのは、許六の意向であり、「本朝文選」の方針をふまえたものと考えられる。おなじ支考の編集ながら、後年の「和漢文操」（享保十二年刊）のなかでは、「弔祭類」に「浪化公終焉ノ記」と題する長大な追悼文をのせており、ここでは「終焉記」の語を用いている。型にはまらない多様なものとするか、経年による考え方の変化とみるべきか、単純には見定めがたい。

時代はくだって、横井也有の文集『鶉衣』（天明七年以降刊）では、たとえば「草風誄」「悼八亀辞」「悼五条坊文」などと、やはり一定はしていない。かとおもえば、天明七年（一七八七）に没した蓼太を追悼して完来がさげた追悼文は、「蓼太居士終焉記」と題されている。また享和三年（一八〇三）三月に亡くなった二柳についても、『不二斎終焉記』と題して刊行された。本書は、亡き人の事跡や臨終について桃序（のちの奇淵）が記述するだけでなく、本文を追うようにして頭注が施されている。注釈の内容もさることながら、追悼文をまるで古典作品としてみせつけるかのような趣向である。いずれにせよ、俳諧の大立者の逝去にあたって、「終焉記」と名づけて追悼文を公刊するこ

とは、まれな事例とはいえなくなったようだ。その流れにおいてみるならば、凡菫の試みた「夜半翁終焉記」は、あるいは先駆的だったと評することができるだろう。

こういう経緯のなかで、改めて貞室の「貞徳終焉記」の伝わりかたに目を向けてみたい。貞徳が息を引き取ったのは、承応二年（一六五三）十一月十五日、それをうけて貞室が追悼の文章と独吟歌仙をものしたのは、「承応貳年暢月下浣日」（十一月下旬）のことだった。そこでは当該の追悼文に、表題めいた記載はいっさいなかった。

承応二年のあと、この文書がつぎに世に顔をみせるのは、一世紀以上のちの明和七年（一七七〇）のこととなる。前年十月から在洛していた江戸の俳人泰里は、どこからかこれを手に入れたらしい。おそらく巻子の状態で入手したと想像される。そして、俳友であつた太抵・蕪村・嘯山に披露することになった。一覽した三人は、それぞれ識語とも鑑定ともみられる文章を寄せた（嘯山は漢文）。太抵の文辞には時日の記載がないが、蕪村の文章には明和七年六月、嘯山には同年閏六月とあつて、順立てを思い計るならば、最初に目にしたのは太抵と想定できるだろう。そうすると、太抵・蕪村・嘯山の順に、しかもおそらく別々の場で眼福を得たと想定される。

太祇の文章のなかに、「今五疊庵に見るのさちをよろこぼひて、いさゝかこゝにそのよろこばしきをいふ也」という一文がみられる。五条に由来する五疊庵に泰里があつたのは、入洛直後の明和六年十月から翌年の夏にさしかかるまでの間だった。もし五条通界隈であれば、島原在住の太祇にとつては訪ねやすい位置の庵だったはずである。その後、涼みができる鴨川べりへ移ったあとの小庵は、「五席庵」と名づけられた。何月何日かまでの確定できないが、移転祝いとして蕪村が贈呈した自画賛によると、明和七年の五月ころと考えられる。それを考慮するならば、蕪村・嘯山が閲覧したのは、移転以後のことだったかもしれない。また嘯山の「二三の知己にこれを徴するの一言を請ふ」（原漢文）という一文を考慮すると、まさしく太祇・蕪村・嘯山が「二三の知己」その人にほかならないのではないか。そしてこの知己らこそが、貞徳を追悼する貞室自筆の逸文にまちがいないと鑑定したのである。

さて、現在伊賀市の芭蕉翁記念館に所蔵される本文の全容については、乾慈雄編の影印本『貞徳翁終焉記并百韻』（一九九九年刊）、また先掲の塩崎論文「貞室自筆「貞徳終焉記」について」などで確認することができる。詳細はそれらにゆだねるが、現存の卷子全体を概括すると、貞室筆の追悼の文章と独吟連句

があつて、それに続けて太祇・蕪村・嘯山の文章がきて、さらにこれらをはさむようにして、首と尾に、虚子・青々・素石、および露石・月斗といった近代の面々の自筆句文がしたためられている。時代的には一六五〇年代（承応期）、一七七〇年（明和期）、一九一五年ころ（大正初期）と、とびとびの三時代にわかれる。表装は別にして、内容としてはこれら以外に手は加わっていない。となると、芭蕉や其角をはじめ、元禄期の人びとの目に触れる機会は、おそらくなかったと考えてよいだろう。

肝心の貞徳を追悼する貞室の文章だが、そのものに表題らしきものは付されていない。太祇や蕪村の文章のなかにも見あたらない。ただ、嘯山の文中に「長頭翁易簪記」（「易簪」は、学徳ある人や高貴の人の死）の文字があつて、かううじてその内容が示されるのみである。逆にいうと、この時点では「貞徳終焉記」のタイトルは存在しなかったことになる。

これに「貞徳終焉記」の名称が与えられるのは、おそらく泰里が江戸に持ち帰つて以後のことと想像される。現時点で判明する文字情報としては、大田南畝「続三十幅」に本作が収録されたときの題名が嚆矢ではないかと考えられる。「大田南畝全集」（岩波書店刊）には「続三十幅」の目録として、つぎのように掲載されている。

貞徳終焉記

右貞徳翁終焉記一卷、一蕪軒貞室手書本也。於「屋代

氏弘賢家「見」之、今得「屋代氏模本」、聊不「違」板字「

而写」之。寛政己未神無月二十一日

杏花園

南畝は、屋代弘賢宅で原本を見たと言っている。己未、すなわち寛政十一年（一七九九）十月のことだったという。泰里が本書をたずさえて京都から江戸に戻ったのが、明和七年（一七七〇）秋のこと、南畝の目にふれたのは、それから二十年近く隔たっている。泰里からどのような経路を伝って弘賢の手に渡ったのかは、まったく不明。泰里と弘賢は二十歳以上の歳の差があり、人脈上のつながりもわからない。いずれにせよ、この二十年のあいだに弘賢の所蔵となったものを、南畝は閲覧したことになる。南畝はまたとない貴重な文献と判断して、筆写にとりかかったのだろう。皮肉というべきか、あるいはおかげでというべきか、以来「貞徳終焉記」本文のみならず、蕪村らの文章も、「続三十幅」所収の南畝写本に依拠することとなる。先年の『蕪村全集』巻四「俳詩・俳文」（一九九四年刊）まで、ずっとこの写本によって本文が提供されてきたのだ。それが近年の原本出現により、ようやく原本に基づく閲読が可能になったということである。

こうして蕪村も無縁ではなかった「貞徳終焉記」だが、じしん逝去ののち、弟子几董によって書かれた「夜半翁終焉記」とはなんらかの関連をもったのだろうか。念頭におくべきは、蕪村逝去の天明三年時点には、「貞徳終焉記」はすでに江戸にあって、京都には存在しなかった現実である。

では、泰里在洛時の明和六、七年ころ、几董に瞥見の機会があったのだろうか。それはきわめてデリケートな問題である。というのは、几董が蕪村に入門したのが、まさにこの時期にあたるからである。周知のとおり、蕪村が俳諧宗匠となつて夜半亭を継承するのが、明和七年三月のこと、そして立机条件のひとつが、几董の入門だったとされている。これ以前は、両者の接触はほとんど想定できない。泰里・几董の句会同席も、現存する資料の範囲でいうと、泰里が鴨河畔に移転したのちの七月朔日からはじめてである。なによりも、太祇以下三者の文章のようすからして、泰里と接点のない几董のような立場の若輩が閲覧の機会を得たとは考えにくい。そもそもこの時点では、「貞徳終焉記」の名称はいまだなかったのである。

几董が師夜半亭蕪村の追悼文を執筆・公刊するにあたって亀鑑としたのは、其角作「芭蕉翁終焉記」をにおいてほかはないだろう。宗祇・貞徳など、同種の追悼文がすでに存在したにせよ、

几董の視界にははいっていないかつたとしてよい。²となれば、本稿第一章でのべたところに回帰しただけのこととなる。「貞徳終焉記」の出現と「夜半翁終焉記」の執筆は、十数年を隔てるのみで、環境的にはほとんど手の届くところにあつたものの、直結はなかつたと判断される。当事者に自覚はなかつたとはいえ、両者は時代を同じくするところで、いわば素知らぬ顔をして、俳壇・文壇をすれちがつたともいえる。

特定の句文しか当事者几董の視野に入らなかつたのは時代のなせることで、やむを得ないというべきだが、数百年を俯瞰できるわれわれの立ち位置から見ると、ずっと多面的なとらえかたも可能となる。かりに〈終焉記の系譜〉という節序を仮想したとき、宗祇の追悼にはじまり、貞徳、芭蕉、蕪村などと、長い歴史のなかに幾多の俳人をおいて眺めることができる。はじまりは表題すら付与されなかつたものが、ときに「誄・弔・悼」などの題が与えられることもあり、また「終焉記」と称されることもあつたということである。それにしても、追悼文がこれだけ連綿と送られされるジャンルは希有というべきだろう。

そうした文芸様式にたいして「終焉記」と命名するきっかけが、版本『詞林意行集』だつたとして、これに触発されるのかのようにして、数年後には「芭蕉翁終焉記」と銘打って、追悼文

が公刊される。俳諧の世界では、師と仰ぐほどの俳人にとどまらず、生前親しく交わつた俳友ともいふべき故人にたいしても、同種の句文をささげることが珍しくなくなる。それでもただちに「終焉記」の名称へと収斂することなく、多様さをみせてゆくが、やがて「終焉記」の語がしだいに定着してゆく。それが、奇しくも中興俳諧の時代、すなわち芭蕉および蕉風の再評価の時期と重なつたのだ。自覚のいかんはともかく、蕪村から几董へとつながるところで、「終焉記」という名称の方向性が定まつた事態は、俳諧史上の一エピソードではあるだろう。

当初は名称すらなかつた文章だつたものが、時とともにそれなりの姿容がほどこされ、やがて新しいかたちの文辞を生み出す契機ともなつた。敬愛すべき故人の顕彰となることを願い、あの世へ送り出す惜別のこころがこめられた。外形・内容ともまだら模様のうちに追悼文が生み続けられ、俳人どうしの紐帯をつむいでいった。幾筋もの線がつかず離れずして、そのうちに「終焉記」という命名に収斂してゆくこととなる。連綿たる俳諧史の流れと、そのときどきの時代の厚みのなかで、そうした試みが続けられていった。互いの関連性の有無や濃淡の模様はさまざまだろうが、陸続たる追悼記の試みこそ、〈座の文芸〉たる俳諧の特性を映し出しているということになる。それが、

一門の結束や継続性の確認につながるだけでなく、俳諧に生きる者としての連帯意識をかもしたすことにもなっただろう。ひいては、四百年の俳諧史をつなぐ一助となったと評することもできよう。

【注】

(1) 在洛中の泰里の移転と庵号の変更については、拙稿「泰里と上洛―点茶そして煎茶へ」(『近世文芸』第八十号)、および拙著『蕪村余響』(岩波書店刊)所収「茶人と文人―春の夜や宗佐の庭を歩行けり」を参照されたい。

(2) 蕪村周辺の「終焉記」としては、明和二年(一七六五)刊の雲裡坊追善集『烏帽子塚』に、「終焉記」と題する追悼文が掲載される。本集には蕪村同座の追善歌仙が見られるが、几董の視野に入っていたとは考えにくい。ただし「終焉記」という題名の普及については想定することも可能である。

(ふじた しんいち／本学教授)